

巻頭インタビュー

元
氣
の
源
を聞いてみました

宇宙工学者

的
川
泰
宣
さん



壁は乗り越えるもの。
躊躇せずに
体当たりすることが大事。

ケット開発の父、糸川英夫先生との
出会いでしょうか。大学院で先生の
研究室に入ったのですが、忙しくて
全く指導してくれない。文字通り背
中を見ながら育ちましたが、もの
感じ方、発想、行動の仕方等、あれ
ほど影響を受けた人はいません。

なかでも一番優れているのは発
想だと思えます。何かを達成した
いという強い欲望と諦めないで貫
徹する意志さえあれば、常識を逸
脱した新しい発想が生まれるんで
すね。世の常識という思考回路が
ないんです。ペンシルロケットの開
発でも面白いエピソードがありま
す。普通ロケットは上に打ち上げ
るものだと思うでしょう。ロケット
開発の黎明期だった当時、ロケッ

トの「飛び方を調査」するのが目的
だったのですが、日本には精度の
高いレーザーがないから上に打ち
上げて意味がない。そこで先生
の一言が、「ロケットは、上に向かっ
て打ち上げなきゃいけないのか？」
(笑)。こうして、世界でも史上例
を見ない「水平に飛ばすロケット」が
生まれたんですね。

先生がよく色紙に書いていたの
は「人生で最も大切なものは逆境
とよき友」だという言葉。逆境とい

うのはバネになる。壁は乗り越え
るためにあるもので、必ず突破す
る発想が生まれるんです。壁にぶつ
かったとき躊躇せずに全力で体当
たりする姿勢は一生必要な力だと
思いますね。そしてアイデアを出
し合ってそれを実現する仲間も大
切。宇宙の仕事は机の上でやるも
のじゃなく、仲間と一緒に取り組む
スポーツの団体戦みたいなもので
す。我々も困難に直面したときは、
糸川先生ならどうするか、と話し
合いながら、チームの力で壁を
乗り越えてきました。若い頃に団
体戦を基本とするスポーツをやる
ことは、厳しい世界を乗り切るに
も役立つと考えています。

私が関わってきた人工衛星や探
査機は30数個ありますが一番印象
的だったのは大学院最後の年に日
本で初めて打ち上げに成功した人
工衛星「おおすみ」です。もともとエ
ンジニアとしてロケット開発に携
わってきたわけですが、80年代半ば
からは、国際関係や広報教育の役
割も兼務してきました。03年に打ち
上げた小惑星探査機「はやぶさ」は、
内之浦宇宙空間観測所の所長とし
て最後の打ち上げだったので、別の
意味で大変感慨深かったですね。

広報教育の仕事に基軸が移って
久しいですが、今私が取り組んでい
るのは、「全ての人が幸せになれる
社会と宇宙のつながりを考え伝え
ていく」ことです。子供の頃、呉での
空襲や原爆投下後の広島を目の当
たりにして、非常にショックを受け
ました。ですから定年を前に、今後
自分が社会の役に立てることを、と
考えたとき、子供の頃思い描いてい
た、皆が幸せになる社会、平和な社
会がまだ来ていない現実がとても
気にかかったんです。宇宙のルー
スを辿ると生命のルートと本質的に
は同じところへ行き着くんですよ。
今後もこの星全体の平和や人の幸
せを願って、宇宙と生命の絆の尊さ
を伝えていきたいと思えます。

宇宙飛行士の若田くんと話して
意気統合したのは、「次世代が手
掛ける宇宙プロジェクトは地球全
体の平和につながる、一大政策とな
る可能性がある」という希望です。
ウクライナ問題でアメリカとロシ
アが対立していた地上とは対照的
に、彼がいた宇宙空間ではアメリ
カ人とロシア人のクルーが力を合
わせていた。宇宙こそ、地球にとっ
ての聖域になれる領域なのではな
いでしょうか。

